

鹿児島の昆虫41

ミツバチと共に生きる社会へ 昆虫担当 金井 賢一

2013年5月27日、指宿枕崎線に架かる歩道橋に作られたニホンミツバチの開放巣を取り込む作業を行いました。鹿児島市施設課が住民から撤去して欲しいとの依頼を受け、JRとの協議で歩道橋の高さまで足場を組み、列車往來の監督員を付ける形で作業にあたりました。駆除業者により薬剤散布で退治することも検討されましたが、鹿児島昆虫同好会の有志により、できるだけハチたちに負担の無いように巣箱に取り込み、新天地に移住させる計画です。



岡山理科大学の高崎浩幸教授の指導で、県立博物館では過去2回の開放巣取り込みに成功しています。しかし今回は大型で、今までのノウハウだけでは通用しない、難しい取り込みでした。現在経過を観察中です。

一般に「ハチ＝怖い」と思われがちです。ミツバチも巣を刺激すれば働きバチは防衛のために刺すこともあり、人に近すぎるところでは共存が難しいのも事実です。しかし、家庭菜園のトマトやピーマンが実るのも、ムクドリたちがついばむセンダンの実が成るのも、ミツバチたちが花から花へと蜜や花粉を求めて飛び回のおかげです。ハチのいない世の中では、人間が植物からの恩恵を受けるのは難しいのです。



もし身近にミツバ 巣板を串で巣箱に固定するチの巣ができてしまったら、そこに巣があることを許してあげられないものでしょうか。人があまり利用しない場所に小さな隣人が新居を造ったのを見守ることも大切なことではないでしょうか。

鹿児島の植物48 火山と植物～腹五社の森

植物担当 寺田 仁志

鹿児島県指定の天然記念物「火山噴火によって埋没した鳥居、門柱」がある黒神地区に行ってみませんか。

大正3年の噴火では2m以上の凄まじい降灰があり、学校にも家にも灰が積もり、腹五社神社の鳥居も貫（上から2段目の横柱）の上まで埋まっています。

その奥に腹五社神社の鎮守の森があります。そこは、不思議なことに桜島にはほとんどない照葉樹であるスダジイの森です。

桜島の森は100年前ほとんど里山でした。森から薪をとったり、肥料にする落ち葉を集めたり、牛馬の餌として絶えず利用されたりしたため、スダジイなどの照葉樹の森は鎮守の森を除くとごく限られたものでした。

当時の写真を解析すると、黒神地区では降灰で里山や鎮守の森を含め植物の大多数は枯れてしまいました。腹五社神社周辺も大木であったマツやその他の広葉樹もすっかり葉を落として枯死したと考えられます。

ところが腹五社神社の森は、現在スダジイ

の森が成立しています。大事な鎮守の森だから植林がされたのでしょうか。

そうではありません。スダジイなどの照葉樹は幹に隠れた芽をもっています。大量の降灰で大多数の樹木が枯死した中、幹が生き残ったスダジイが、隠れた芽（潜伏芽）を随所で出したのです。普通は枝の先端から出すのに、根際から先端まで幹の胴体から芽を出す「胴吹き」が起こったのです。

その後芽が成長し階段状に枝が出て、特に日当たりのよい上部がよく伸びて鬱蒼とした森がつくられたものと考えられます。



森から少し離れ階段状に枝を出したスダジイたところにある「百年椿」も同じしくみでヤブツバキが芽吹いたものと考えられ、黒神地区は大量降灰から再生する森の姿を見ることが出来るホットスポットとなっています。